

保育かながわ

発行所
 横浜市中区山下町1番地
 シルクセンタービル3階
 325A号室
 一般社団法人
 神奈川県保育会
 発行人
 萩原敬三
 題字
 故内山岩太郎筆

第五十二回 神奈川県保育事業大会

〈式典〉

二〇一九年四月二十日(土)に神奈川県社会福祉会館にて第五十三回神奈川県保育事業大会が行われました。

「すべての人が子どもと子育てに関わりを持つ社会の実現を目指して」との主題のもと、渡部総務予算対策委員長の司会進行により、宮田副理事長の開会のことばをはじめに式典が開催されました。

はなのおさなごの斉唱から児童憲章が朗読され、保育の基本を心に刻み会場が一つになりました。

続いて、主催者を代表して萩原理事長より御あいさつをいただきました。

大会開催への感謝と此度表彰を受けられる方々へお祝いの言葉が述べられました。また、日々の保育をより良

い方向へと歩み進んでいけるように神奈川県と共に協力していくこと、来年より、県保育会と保育士会が一つになつて体制を整えていくこと等を述べられました。



そして、永きにわたり開催されたこの県社会福祉会館での開催が最後となることを惜しみながらも新たに歩んでゆけるよう皆で協力してゆきた

いこと、研究発表を通し各地域で情報交換を行い共に保育を考えていきたいこと等述べられました。

続いて、永年勤続者表彰式が行われ四十九名の表彰者の紹介がありました。

代表して、榊井新様(藤沢市高谷保育園・園長)、齊藤順子様(横須賀市富士保育園・保育士)、小林貴子様(小田原市国府津保育園・調理師)の三名の表彰が行われました。

次に、叙勲受賞者の小林勇次郎様(横須賀市元太田和保育園)、佐藤喜代子様(小田原市元みゆき保育園)、厚生労働大臣賞表彰受賞者の坂口紀恵様(横須賀市浦賀保育園)、阿部和子様(横須賀市日の出保育園)、芝玲子様(小田原市富水保育園)、相原千恵子様(厚木市厚木ふ

じの花保育園)、齋藤由紀子様(茅ヶ崎市レイモンド湘南保育園)、富田弘美様(鎌倉市岩瀬保育園)、瀬戸美智子様(二宮町二宮保育園)、神奈川県民功労者表彰受賞者の萩原敬三様(伊勢原市大原保育園)、神奈川県保育賞受賞者の明野真紀様(横須賀市三和こども園)、斉藤和代様(大磯町元町立国府保育園)へ功績を称え記念品贈呈が行われました。



来賓より、初めに神奈川県福祉子どもみらい局・香川智佳子局長よりご祝辞をいただきました。県の取組として施設整備をはじめ保育士確保

の問題と合わせ質の向上を図りエキスパート研修等進めていくことや、児童虐待や子どもの貧困問題、障害児保育への早期発見、医療的ケア等子どもへの課題も多くあり、取り組みを進めていく中で連携を取りながら誰一人取り残されないよう、また、家庭を守っていくべきで一緒に解決していききたい思いを述べられました。続きまして、神奈川県議会・桐生 秀昭 議長より、子どもを育む重大な役割を担っている活動への尽力や仕事と子育ての両立等様々な問題がある中、保育の向上に取り組み保育会へ感謝の言葉を述べられました。

引き続き、神奈川県児童福祉審議会、松田 良昭 委員長、神奈川県保育士養成施設協会会長であり横浜女子短期大学・佐藤 寛之 学長より温かいご祝辞をいただきました。佐藤学長からは、故 平野 健次 先生の想いを引き継ぎ、予想困難な社会の中で福祉の担う役割が新・保育所保育指針の中に著されており、就学前

の教育の大切さやこどもの生きる力を育む保育を實踐していくことの大切さを述べられました。

最後に来賓の紹介、祝電が披露され、保育士会・後藤 奈津子 会長(中新田保育園)の閉会のことばをもって平成から令和への記念すべき式典が終了いたしました。

化を目的に作成されました。また、来年度の神奈川県保育事業大会をはじめ、活動の拠点となっていた県社会福祉会館の耐震に伴う移転により、今後の活動拠点を新たに設けていかなければならないこと、それに伴い、県保育会と保育士会の一本化をこの一年でどのようにしていくのか検討してゆくこと等述べられました。

第五十三回神奈川県保育事業大会終了後、平成三十一年度の一般社団法人神奈川県保育会の総会が開催されました。

渡部総務予算対策委員長の進行により、会員の出席者及び委任状による議決権の過半数が確認され、総会が開会いたしました。

まず初めに、萩原理事長よりあいさつがありました。昨年度、神奈川県書式を作成し、三月二十九日より神奈川県保育会のホームページからダウンロードできるようにした。この書式は、保育園対応のもので、(認定こども園等他の施設に該当) 監査の簡素

子ども子育て支援新制度のもとに各種の課題に対応しつつ、新たな給付の仕組みの下、各会員の現場では健やかな子どもを育むための取組が進められてきたことが述べられました。

そして、当会の研修が処遇改善に基づくキャリアアップ研修として平成二十九年度のマネジメント分野に加え、保育実践分野が位置付けられたことの説明がありました。このほか年間事業計画に基づき、情報の伝達や研修の充実、各種委員会の開催、保育事業大会の実施、保育園利用者相談室の運営等の諸事業を積極的に推進してきたことが述べられました。

引き続き、平成三十一年度主要事業の実績に続き、平成三十年度収支決算報告が行

総会次第に従って議長選出、議事録署名人の選任が行われ議事に移りました。

また、保育所保育処遇書式の統一化については、当会と県、学識者により神奈川県独自の児童処遇書式及び記載例を作成し、ホームページに搭載されたことの説明がありました。

また、保育所保育処遇書式の統一化については、当会と県、学識者により神奈川県独自の児童処遇書式及び記載例を作成し、ホームページに搭載されたことの説明がありました。

以上を受け、安堂 多津子(横須賀市・三和こども園) 監事より適正に処理されたことを認めた報告がなされました。

引き続き、平成三十一年度事業計画、予算案について報告がありました。以上の内容について特に質疑もなく会場出席者による承認がなされました。

議長より、総会出席、また、委任状の提出減少の状況により今後の総会開催が厳しくならないようできる限りの参加と欠席の場合の委任状提出のお願いがありました。

また、事務局のコスト削減等含め新体制で取り組んでいく旨の説明がありました。

また、保育会役員の退任等に伴い県南より理事を一名選出することや監事交代として新監事の決定と報告を行っていくことの説明がありました。

また、事務局の理事を一名選出することや監事交代として新監事の決定と報告を行っていくことの説明がありました。



澁谷事務局長より報告事項について説明が行われました。平成三十年度事業報告では、

引き続き、平成三十一年度主要事業の実績に続き、平成三十年度収支決算報告が行

引き続き、平成三十一年度主要事業の実績に続き、平成三十年度収支決算報告が行

県保育会と保育士会の一本化についても会員にご意見をいただきながら検討していきたいことや県と共に児童処遇書式に続き小学校との連携を図り就学へとつなげていけるような取り組みも検討したいことが述べられました。

最後に、会場出席者にその他事項で意見を求めましたが特に提案もなく総会が閉会されました。

研究発表

第一会場では、関東ブロックの研究テーマ「保育者の資質向上を図る」に沿って、鎌倉市保育士会研究会と大和市公立保育園、大磯町立国府保育園の三団体による研究発表が行われました。

鎌倉市保育士会研究会は、『乳児期に大切にすること』親子の関わりについて保育園としてどんなことができるのか』と題しての発表でした。鎌倉市では私立・公立の各園から代表者が集まり、保育士間の情報交換・資質向上

を目的とした話し合いを進める中で、共通の課題として出てきた「食事」について、年齢ごとのグループに分かれ指導の検証を行った研究でした。また、平成三十年度に改定された保育所保育指針の中でも「食育の推進」が大きく取り上げられており、保育における「食事」の大切さを考えテーマを選択していました。

今回の研究は、年齢ごとに事例検証を行い、特に咀嚼に注目し、まとめられています。

また、一人ひとりに丁寧に関わり、保育者が口を動かして見せ「アニアニ」と表現したり、スティック状の食材を用意するなどの工夫した指導が報告されました。

咀嚼がしつかりできてくると徐々に食べる意欲に繋がるとさらには活動への広がりも感じられました。また、保護者にも離乳食懇談会を開催したり、連絡帳を活用して家庭との連携を図るなど、積極的に働きかけることで家庭での食事にも生かされたとのことです。0歳、一歳及び二歳の年

齢ごとの研究グループを作り日常の具体的な指導のエピソードを取り上げたことで、より深い内容になったと思われるます。

続いて、大和市公立保育園による『保育士の資質向上』アンケートやセルフチェックを実施して見えてきたもの保育者の資質向上のあり方』については、公立四園から園長一名、副園長一名、保育士四名の研究員で構成される委員会、それぞれの立場、視点での意見がまとめられました。

まず、保育士の意識調査を実施して課題を見出し、園内研究に繋げていました。また、地域の基幹保育園としての取り組みも今回の研究に大きく関わっていることが感じられました。保育内容においては、継続的に子どもの成長発達を保障するための運動、環境、絵画・造形、食育の保育内容チームを編成し、具体的な活動内容を振り返り、さらに質の向上を図るよう取り組みを進めているとの報告があり

ました。また、意識調査やセルフチェックなどを実施することにより、日々の保育を振り返る機会になったこと、そして自己や他者と向き合うことで子どもの人格を尊重する職員間の共通認識や、より良い保育を目指す意識が高まったとのことです。さらに公立保育園が地域の基幹園として取り組みを行っていくことで、保育内容や環境整備等を振り返る機会となり、お互いの意識を高め合い、ひいては大和市全体の保育水準が高められていることを感じました。

最後に、大磯町立国府保育園より『保育士の資質向上を図る』子どもの育ちを考える保育士の役割』について、研究発表が行われました。はじめに、一人ひとりの姿を捉え、クラス全体の課題の把握、保育指針の改定による「幼児期の終わりまでに育ってほしい十の姿」の共通理解。次に、年齢別の「育ちのねっこ」、「ステップカリキュラム」、「アプローチャカリキュラム」の作成、課題解決の実践・事例報告、

考察という流れで研究が進められています。園単独の研究の成果として、〇歳児から年長児までの育ちの流れを分かりやすく示すことで、園全体で子どもを見守り育てている様子が伝わってきました。各種カリキュラムの作成は、育つてほしい姿が明確になり望ましい遊びや活動、クラス全体の課題等について職員間での共通理解を深め事例を通じた意見交換を行うことにより、お互いに学び合い資質の向上に繋がると思われます。

今回の研究発表では、子どもたちの豊かな成長を育むために、保育士一人ひとりが向上心を持ち、自分自身を振り返り、意識して日々の保育に取り組むことが保育の質の向上に繋がっていくと感じました。また地域の子育て支援を推進するためにも、保育士の資質向上に努めていきたいと思えます。

第二会場では、「子どものよい良い育ちにむけた関係機関とのネットワーク」という研究テーマにそって茅ヶ崎市、

研究を進められていきます。園単独の研究の成果として、〇歳児から年長児までの育ちの流れを分かりやすく示すことで、園全体で子どもを見守り育てている様子が伝わってきました。各種カリキュラムの作成は、育つてほしい姿が明確になり望ましい遊びや活動、クラス全体の課題等について職員間での共通理解を深め事例を通じた意見交換を行うことにより、お互いに学び合い資質の向上に繋がると思われます。

今回の研究発表では、子どもたちの豊かな成長を育むために、保育士一人ひとりが向上心を持ち、自分自身を振り返り、意識して日々の保育に取り組むことが保育の質の向上に繋がっていくと感じました。また地域の子育て支援を推進するためにも、保育士の資質向上に努めていきたいと思えます。

第二会場では、「子どものよい良い育ちにむけた関係機関とのネットワーク」という研究テーマにそって茅ヶ崎市、

小田原市、愛川町の三団体から発表が行われました。始めに茅ヶ崎市保育士会内容研究会より研究発表が行われました。子どものより良い育ちを支える基本は家庭ではないかと考え、市内の未就学児を持つ家庭のニーズや悩みを知るためにアンケート調査を実施。その結果から親子で楽しめる遊び場を知りたいというニーズが多いが、園庭開放を実施しているのになぜ周知されていないのか、またどうしたら保育園で行っている地域支援をより活用してもらえるのかを考え地域で人気の施設を見学にいったそうです。話を聞く体制や環境づくり、他機関と関係を持ち、お互い補っていくことの大切さを学んだそうです。市内公立の三園が地域の公民館に向き、子育てサークルと交流するようになったとのこと。その他、地域支援活動についてのチラシを他機関に置いてもらったりすることで、園庭開放等、保育園で行っている地域

支援の参加者も増え、園が地域の方にとって身近な場所になっていることが実感できています。これから多様な機関と連携、協働を大切にしながら、子育て支援を地域に根ざした保育園として進めていきたいとおっしゃっていました。次の小田原市保育内容研究委員会は、テーマから子どもの育ちおよび子育てをめぐる環境を踏まえて考え、子どもが生きる力を伸ばすにはどうするべきか、また地域関係機関との連携、協働についての発表がありました。就労しているにもかかわらず生活困窮世帯が多く、金銭的貧困だけでなく心の貧困(精神面)に着目し研究されていました。保育所の役割として子ども達の心が日々満たされ、健やかに過ごせるよう必要な支援をすることが重要であること。保護者の気持ちに寄り添い心のサポートをしていくことや文化や遊びなどの提供、子どもが伸び伸びと過ごせるような保育所の環境づく

くりが大切である。保育者のかかわりは子どものより良い育ちをサポートすることにつながるということでした。また自己肯定感を子どもにつけさせていく必要性を感じ、生きる力を育てる保育所で多くの経験をして受容され、成功体験を増やしていくことが大切である。また保護者も共感、受容されることで保護者の自己肯定感も高まり子どもへの対応が変化してくるということでした。他機関との連携では行政各課の役割を知り、今後の課題が見えてきたそうです。二〇二〇年には早期発達支援事業やファミリーサポート支援の利用などを含んだ子ども教育支援センターを設立し、子ども達の健やかな育ちのために保育者や関係機関の見守りができるシステムが構築される計画があり、さらなる支援の充実が図れるようです。保育園だけでなく関係機関との連携は必要不可欠で積極的に働きかけ、情報提供を求めたり、現場の状

況を伝え、共有することでできる対策も増えていくと感じ、参考になりました。最後の発表は愛川町立保育園の発表でした。地域における保育園の役割と子育てライフを支援するということから、日々の保育を通して地域社会の人々と関わりを深めるために町立六か所の園で地域の特性を活かし、長年行われている地域子育て支援事業について発表がありました。園児との交流や保護者同士の交流、あそびの提供を目的とし、活動を続けていくそうです。地域との関わりとして老人会との交流も盛んでした。子ども達も活動が恒例化しているため地域の方に自然と挨拶ができるのだと感じました。地域の方と交流を通して園をより身近に感じ、保育士も関わりを通して協働することの大切さを実感でき、今後さらに地域との輪を広げていきたいとおっしゃっていました。公立保育園は地域社会の中でそれぞれ地域性や専門性を

活かし、他の機関との連携を図りながら地域の方に寄り添い、身近な存在でいることが大切だと改めて感じました。第三分科会では「保育者の資質向上を図る」というテーマに、『職場研修シートを利用しての保育マネジメント・日常的対話』『園のシステムと園長のリーダーシップ』『保育カリキュラムの作成と見える化』『事例を通じた保育の振り返り』等いろいろな角度からの研究発表でした。助言者の目白大学 原孝成教授から、「制度(システム)の質(子ども・利用者にとつての適切なシステム)」「保育士個の質(専門性)」「関係性の質(職員・保護者・地域・関係機関の連携)」「組織の質(園運営・財源・リーダーシップ・危機管理)」についてお話を頂き、後半はワークショップ形式で他都県市の参加者の方と意見交換や意見をまとめて発表する時間もあり、とても学びの深い時間でした。各分科会終了後、閉会いたしました。

第六十回

関東ブロック保育研究大会

令和元年七月三日から二日間、埼玉県さいたま市ソニックシティにて行われました。

梅雨空でも役員の皆さんのピタミンカラーのポロシャツと明るい笑顔で、会場は爽やかさがあふれていました。

大会初日のオープニングアトラクションはテノール歌手嘉松芳樹氏の心に染みる歌声と嘉松美香氏のピアノ演奏による温かい日本の歌の世界が広がり、参加者の皆さんも口ずさみながら自然と笑顔になっていきました。

開会式では埼玉県保育協議会会長・大会委員長の喜多濃定人氏の歓迎の言葉の後に、「花のおさなご」斉唱、保育関係物故者への黙祷、児童憲章朗読が行われました。

続いて、主催者を代表して埼玉県知事上田清司氏、関東

ブロック保育協議会会長奥村

尚三氏からの挨拶、開催地さ

いたま市長清水勇人氏の挨拶

の後、来賓の方々を代表して

万田康氏の祝辞があり、最後

に埼玉県保育協議会副会長岩

本一盛氏による大会決議宣言、

開会式が終了しました。

その後の基調講演では、玉

川大学教授・大豆生田啓友氏

より「養護と教育の実践のも

とに保育の質の向上を考え

る」というテーマで、『乳児

期を育てる大切な二つの視点』

『子どもを一人の人間として

見ること・そのために大切な

こと』『保育の質と子ども主体

の協同的遊びの保育』等につ

いて実践例や実際の子どもの

姿の映像を交えお話を頂きま

した。すべての園が子ども主

体の質の高い保育をすすめて

いきましょうというメッセー

ジは心に深く刻まれました。

その後の記念講演では、旭山

動物園園長・坂東元氏より「命

のかがやきをみつめて」とい

う演題でお話しを頂きました。

『命をつなぐということ』ウ

ータン物語」という実際の記

録物語を見せて頂き、「自分の

居場所がある自分らしくい

られる」ことの大切さ、「嫌い

なものを排除するのではなく

『嫌いなもの』として存在を

認め合うこと」というお話は、

改めて自分自身を振り返るこ

とが出来た貴重な講演でした。

最後に第六十一回関東ブロ

ック保育研究大会（令和二年

六月二十五日（木）～二十六

日（金）が開催される長野県

保育連盟の会員の皆様が舞台

に登場し、長野県の魅力とテ

ーマとなる「やまほいく」の

紹介の後、たくさんの皆様の

参加をお待ちしていますとの挨拶があり初日が終了しました。

翌日は分科会が行われ各都県市の代表による研究発表がなされました。神奈川県からは、議長に中郡の二宮保育園相馬理事、発表に中郡大磯町立国府保育園推進委員と小田原市保育内容研究委員会の皆さんが発表されました。

関ブロを終えて

第一分科会 議長

二宮保育園 相馬正覚

去る令和元年七月三日～四日、埼玉県さいたま市、ソニックシティに於いて開催されました、第六十回関東ブロック保育研究大会に、大変役不足ながら、神奈川からの議長として、第一分科会に参加させていただきました。

思い起こせば四月の神奈川県保育事業大会に於いても分科会の議長を仰せつかり、右も左も解らぬままなんとか勤めさせていただきましたが、分科会終了後の処理委員会に

於いて、埼玉開催の保育研究大会における神奈川からの分科会議長に指名を受けました。まさに私にとりましては青天の霹靂であり、能力不足と感じていたため、お断りをしたかったのですが、全く断れる雰囲気でも無く、気がついたら「宜しくお願います。」と処理委員会に参加した皆様

に言っている自分がいました。先輩から「誰もが通る道だから。」と肩をたたかれ、呆然としましたが、決まった以上はしっかりと勤めなければ神奈川の先生方の顔に泥を塗ってしまう事になるな、と観念したといいますか、思いを新たに致したものです。

先輩方から「しばらくすると埼玉さんから分科会の資料が送られてくると思うから、よく読み込んで準備しておくといよ。」とアドバイスをいただきましたが、待てど暮らせど資料が送られてくることはなく、あつという間に七月の保育研究大会当日を迎えました。

大会初日は開会式等の日程をこなし、十七時三十分より議

長と発表者、助言者、開催県幹事の方とで分科会打ち合わせが行われましたが、その時にはじめて発表者の資料をいただき、議長は各分科会につき二人、午前と午後に分けて担当しますが、午前を担当することが決まりました。

分科会打ち合わせが終わると、萩原理事長はじめ神奈川の参加者の皆様が、大宮市内の居酒屋で発表者と議長の激励会を開催して下さるとのこと、会場へと急ぎました。

会場では、特別なお料理と貴重なお酒をいただき、明るく日頃の分科会への鋭気を十分に養わせていただきました。

その後宿に戻り資料に目を通し、床につきましたが、緊張のせい或少し寝付けなかった事を覚えています。

四日の第一分科会では、午前に、新たな時代の保育実践、と言う大きなテーマの中から①千葉県による新たな保育実践へすべての子どもに向けて、多文化共生を目指して②山梨県による育ちあおう！磨きあおう！南アルプスプ

レイリーダー〜わくわく心動かす保育のために〜

③茨城県による危機管理〜子ども達の安全のためにできること〜

④埼玉県による新たな時代の保育実践〜すべての子どもに向けて、四つの発表を午前にすべて行い、お昼の休憩に参加者から各発表への質問事項を紙で提出していただき、午後には発表者に再び登壇をお願いし、提出された質問に答えていただき、助言者である星美学園准教授 遠藤 愛先生よりそれぞれ講評と、その後、総括のお話をいただきました。

遠藤先生は臨床心理士でもありまして、多岐にわたったテーマを理路整然ときれいに総括していただきました。新たな時代の保育実践のために大切なお話をこの神奈川でも拝聴したい内容でありました。自分としては、議長として午前の各発表の進行と、発表の合間に自分なりですが関心したことや、疑問に感じた点を各発表者にぶつけてみました。大変緊張を伴いましたが、参

加者の皆様、また神奈川の保育会諸先生のお陰で、なんとか形にだけはすることができたのかな、と感じております。

帰りには先輩方が、私の近所でも、と二宮で慰労の席を設けていただき、またしてもおいしいお酒を頂戴し、感謝に堪えません。

今回、議長を勤めさせていただき、さまざまな勉強と、経験を深めることができました。

大会に参加させていただきました。ありがとうございます。



城前寺保育園 皆川節子

この度、令和元年七月に埼玉県ソニックシティ開催された保育研究大会に参加させて頂きました。

「子どものより良い育ちにむ

けた関係機関とのネットワーク」のテーマから「みんな育てよう小田原の子どもたち」

のサブテーマでの研究がスタートしました。保育の現場から気づいた現状を把握。保護者と保育者のアンケート調査からみえた子どもの「心の貧困」「子育て支援」「子どもの生きる力」の研究から、小田

原市の他機関との連携の見直し。保育所と他機関の連携はあるが他機関同士の連携が機能されていない現状がありました。子育てに戸惑う保護者のサポートや子どもの育ちは、

保育所だけでなく、周囲の人たちで見守って欲しいことを行政機関へ伝えてきた経過を発表しました。緊張感の中、小田原の大勢の応援に安堵の気持ちとなりました。今後の保育に向け貴重な経験となった発表でした。神奈川県の関係者皆さまには感謝の気持ちです。有難うございました。

国府保育園 谷酒・疋田

第六十回関東ブロック保育研究大会にて、発表させて頂

きました。第3分科会では、

「保育者の資質向上を図る」というテーマでした。このテーマに関心を持つ方が多く、二百名位の参加がありました。

発表者は東京都練馬区、群馬県太田市、千葉県山武郡、そして神奈川県大磯町でした。どの園の発表も園内研修の実施・充実を図りながら、研修で得た成果を職場で共有し、保育の質の向上に試行錯誤されていることが伝わってきました。

私たちの今回の研究にあたっては、平成三十年度の「保育所保育指針の改定」に伴い、保育指針の内容を職員間で共通理解し、「保育のあり方」や「子どもの育ち」を見直すきっかけとなりました。まずは、子どもたち一人ひとりの育ちをしつかり把握することから始めていくと、クラス全体の弱い点が明確になってきたことに気づきました。その弱い点に目標をおき、これを基盤にし「年間カリキュラム」を見直しました。

研究を進めるにあたり、保育指針に打ち出されている「十の姿」はどのように育っていくの

かを、この園ならではの活動や子どもの姿、保育士の関わりなどを洗い出しました。〇〇六歳までの育ちを見通して「どういう子どもに育てていきたいか」を考えました。乳児期は幼児期までに育つてほしい姿を考え、
「穏やかで安定した生活」「身近な人との関わり」「環境との豊かな関わり」を、三つの柱を土台とした表を作り、「育ちのねっこ」と名付けました。〇歳児の保育では、子どもの気持ちを受け止め、心地良い思いをたくさん重ね、保育士との愛着関係を深めることが、一歳児への心の成長に繋がっていくと考えます。一歳児は、「何が何でも」というのは全く通用しないので「いやだ↓泣く↓抱きしめてもらう↓一緒に考えてもらう」を繰り返すことで、心が潤い豊かな気持ちを育む一歩一歩を過ごすことが大切になります。二歳児では、子どもの様子に合わせて、どのような遊びや活動が望ましいかを考えて、日々の生活の中で様々な経験を重ね、思う存分楽しむことが幼児組への主体的な活動に繋がって

いくと思われれます。乳児期の『育ちのねっこ』から年長組修了までに育つてほしい「十の姿」を捉える中で、幼児組において年間の活動内容を見直し、課題に向けて何を重視し、何を体験させていくのか共通理解を図り、育つてほしい姿を表にまとめてみました。



総合的な活動を通して年少組から年中組へ、年中組から年長組へと個々の成長が「いつたりきたり」と一歩ずつ豊かな成長ができるよう『ステップカリキュラム』と名付けました。就学を迎える年長組は、乳児期からの『育ちのねっこ』、年少中組の『ステップカリキュラム』を土台として、そこで培った育ち

をさらに育てていかなければなりません。そこで年長組は目的をもって行事に取り組めるようにし、保育園独自の『アプローチカリキュラム』を作りました。愛情を注いだ「乳児組の育ちのねっこ」や見通しを持った「幼児組のカリキュラム」の作成を行うと、「十の姿」だけに目標をおいた関わりをするのではなく、子どもが主体的・意欲的に力を発揮できるよう、環境作りや個をみつめた援助をしていくことが、保育士の大切な役割であると改めて感じました。幼児組のカリキュラムでは、今までの活動を表にし、明確にしたことにより、個やクラスの成長の課題の把握や保育士自身の指導の仕方を考える良いものになったと思えました。また、問題解決に向けた実践事例・考察を職員間で繰り返し行うことが資質向上につながり、とても重要なことだと改めて感じました。

自分の保育を振り返る」等が保育者の資質向上につながることを発表されていきました。それぞれに異なる研究実践でしたが、保育者の資質向上を目指した、とても参考になる内容でした。
午後からは助言者である白大学教授原孝成先生より研究の講評があり、各園の園内研究がより一層充実し、実践できるような、貴重なアドバイスをたくさん頂きました。
最後に研究を通して学んだことを活かし、子どもたちの育ちの視点を捉え、豊かな成長の育みを目指し、保育を充実させ、これからも職員の資質向上に努めてまいりたいと思います。貴重な経験をさせて頂きありがとうございました。



・この機関紙は、共同募金配分金により発行しております。

保育会事務局事務所移転

2019年12月1日より

〒231-0023 横浜市中区山下町1番地
シルクセンタービル3階 325A号室

TEL : 045-752-7711 FAX : 045-752-7712

平成三十年 保育所等食育研修会

平成三十一年一月二十三日

(火) 晴天に恵まれ窓からは横浜港を望む神奈川県民ホール大会議室において「保育園における子供たちの食育について」と題して、フードコーディネーターで栄養士の森野恵子氏を講師に迎え保育所等食育研修会が開催されました。この研修会には県内の保育所等から栄養士・調理員・保育士・施設長等五十四名が参加。その大多数が栄養士、調理員でした。

食育に最も適したこの幼児期は、その人の一生の食生活の基礎を築き上げる時期で、この時期の食体験が豊かな人間形成にまで及ぼす影響は大きいので、本物の味を伝え知らせたい。家庭では、このことが難しくなってきたからこ

そ、保育園でその役割を担っていくことが大事である。昔は、暮らし(家族)の中で自然と伝えられてきた食習慣が今は意識して伝えないと伝わらない時代である。皆で食べるからこそ美味しいということも大事な一つである。

厚生労働省の「保育所における食育の指針」五つの子どもの像として、一 お腹がすくリズムの持てる子ども、二 食べたいもの好きなものが増える子ども、三 一緒に食べたい人がいる子ども、四 食事作り、準備に関わる子ども、五 食べるものを話題にする子どもとあります。まさに、生きる力となる食に興味・関心が持てるよう日々の給食こそが食育となります。子どもの成長、発達に応じたメニューを保育と関連付けて入れ込んでいく

ことが必要となります。それには、作る側の栄養士・調理員と現場で与える側の保育士との連携、生きたコミュニケーションは必用不可欠となります。何故食べたか、食べな

かったのかの振り返りをすることも大事なことです。そして、意識して五感を使う(見る・触る・聞く・嗅ぐ・味わう)お手伝いから始める(配膳をする・食器を洗う)収穫、調理の体験(ゴマを播る。香り美味しさの違いの体験)何をどれだけ食べればいいのか(三つの食品群を遊びの中で知り伝えていく)等食の大切さ、食べるマナーを毎日が食育と捉え継続し繰り返し伝えていくことです。

最近「マヨケチャラー」といってマヨネーズ・ケチャップがないと食事が摂れない子どもがいるという。白飯の美味しさ、ダシの味が好きな子にしたい。旬の食材で四季を感じ、和食のすばらしさを伝えていきたい。「生きていく命」を戴いていることがわかると、大切に残さず食べようという

気持ちが持てるようになる。調理体験をすることは、調理のプロセスを知ることと同時に自分の役割があったからこそより「おいしい」が増していくことになるのです。

休憩中には、会場後方に株式会社サンワールドさんの試食コーナーが設けられ非常用備蓄食品がたくさん紹介されていました。

後半は偏食のお話からで、子どもにも三回進めて嫌がったら、その日は諦める。何が嫌なのかを探ることが大事。子どもにはリクエストは聞くが、献立は大人が決める。決して食事の時間を嫌な時間にはしないよう十分に気をつける。

おやつはお菓子ではない。子どもにとつての第四の食事(栄養補助)と捉える。噛むメニュー、季節の果物、野菜の入ったうどん、干し芋、蒸しパンなど多彩な献立を考え提供してほしい。

アレルギー対応は、ダブルチェックを栄養士・調理員・保育士等専門職同士の理解と連携が何よりも大事である。

そして、給食室からこそ食育を発信してほしい。地産地消や行事と食育を繋げていくことなど積極的な働きかけをして欲しい。

「早寝・早起き朝ごはん」の合言葉。朝ごはんをよく噛んで食べるとスッキリと目が覚める、よく噛むことにより消化吸収も良くなる。子ども自身の食べる力をつけるためには、伝える大人が、食を楽しむ、美味しく食べることが大切で「わあ、おいしい」という感動を目の前で見せ、伝えていくことが、とても重要な働きかけとなります。難しいこととは思いますが、栄養士や調理員も保育室に行き、子供たちの反応を直に見聞き出来ることより良いとお話しました。

食育に関しては、既に各施設で取り組んでいると思うが、周囲の環境を上手く取り入れたりして、欲張り過ぎず自園で出来るものから取り組むことが、継続していく秘訣とのお話を頂き研修を終えました。